

PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number : 58-082338

(43)Date of publication of application : 17.05.1983

(51)Int.Cl.

G06F 7/52

(21)Application number : 56-180788

(71)Applicant : NIPPON TELEGR & TELEPH CORP
<NTT>

(22)Date of filing : 11.11.1981

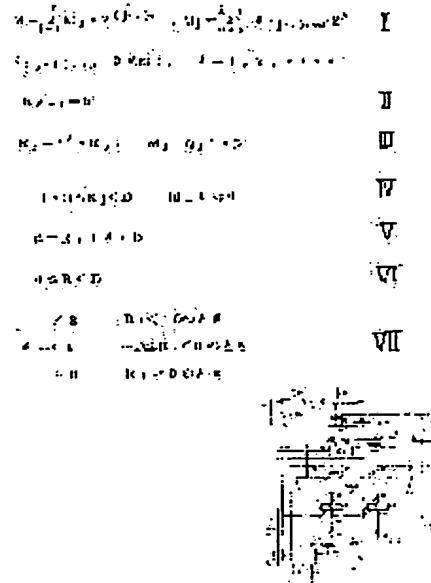
(72)Inventor : MIYAGUCHI SHOJI
TONE FUJIMITSU

(54) DIVIDER

(57)Abstract:

PURPOSE: To simplify a control part for a divider for $M \div D$ where M and D are integers, and to speed up division by applying multiplication to the calculation of a partial quotient.

CONSTITUTION: When a division start indication signal is inputted from a control signal line 12 to a control part 11, integers M and D are set in an M_j generation part 5 and a register 6 through a control signal line 41. Then when the integer M is expressed by equation 1, the arithmetic 7 of a partial quotient Q_j satisfying requirements shown by equations IIIV is performed with regard to $j = 1, \dots, 2, 1$ to obtain the product $-Q_j \times D$ by arithmetic 8. Then, a 4-input, 2-output carrier storage type adder 1 finds $H_j + G_j$; H_j is outputted to a register 2, and G_j is outputted to a register 3 respectively. The H_j and G_j from the registers 2 and 3 are supplied to a carrier propagation type adder 4 to perform addition, and the addition result is outputted through a signal line 34.



LEGAL STATUS

[Date of request for examination]

[Date of sending the examiner's decision of rejection]

[Kind of final disposal of application other than the examiner's decision of rejection or application converted registration]

[Date of final disposal for application]

[Patent number]

[Date of registration]

[Number of appeal against examiner's decision of rejection]

[Date of requesting appeal against examiner's

decision of rejection]

[Date of extinction of right]

⑯ 日本国特許庁 (JP)
 ⑯ 公開特許公報 (A)

⑯ 特許出願公開
 昭58—82338

⑤Int. Cl.³
 G 06 F 7/52

識別記号
 厅内整理番号
 2116—5B

④公開 昭和58年(1983)5月17日
 発明の数 1
 審査請求 未請求

(全 14 頁)

⑤除算器

⑥特 願 昭56—180788
 ⑦出 願 昭56(1981)11月11日
 ⑧発明者 宮口庄司

横須賀市武1丁目2356番地日本
 電信電話公社横須賀電気通信研

究所内
 ⑨発明者 刀根藤光

横須賀市武1丁目2356番地日本
 電信電話公社横須賀電気通信研

究所内
 ⑩出願人 日本電信電話公社
 ⑪代理人 弁理士 草野卓

明細書

1. 発明の名称

除算器

2. 特許請求の範囲

(1) 整数 M , D を入力して $M \div D$ の計算を行なう除算器において、 M を式 (S1) により表現したとき、 $j = \mu, \dots, 2, 1$ について、式 (S2) ~ (S4) の条件を満たす Q_j' を求める演算手段と、 $-Q_j' \times D$ を求める演算手段と、式 (S3) の R_j を求めるキャリア蓄積型加算器からなる加算手段とそのキャリア蓄積型加算器からなる加算手段の出力を加算するキャリア伝播型加算器からなる加算手段と、式 (S5) ~ (S7) の条件を満たす δ を調べる制御手段をもつ除算器。

$$M = \sum_{j=1}^{\mu} M_j \cdot 2^{(j-1)\lambda}, M_j = \sum_{\alpha=0}^{\lambda-1} \delta^{(j-1)\lambda+\alpha} \cdot 2^{\alpha} \quad (S1)$$

$$\delta^{(j-1)\lambda+\alpha} = 0 \text{ 又は } 1, \quad \lambda = 1, 2, \dots$$

$$R_{\lambda+1} = 0 \quad (S2)$$

$$R_j = 2^{\lambda} \cdot R_{j+1} + M_j - Q_j' \cdot D \quad (S3)$$

$$-t \cdot D \leq R_j < D \quad \text{但し } t \geq 0 \quad (S4)$$

$$R = R_1 + \delta \cdot D \quad (S5)$$

$$0 \leq R < D \quad (S6)$$

$$\delta = \begin{cases} 2 & R_1 < -D \text{ のとき} \\ 1 & -D \leq R_1 < 0 \text{ のとき} \\ 0 & R_1 \geq 0 \text{ のとき} \end{cases} \quad (S7)$$

3. 発明の詳細を説明

この発明は整数 M , D につき $M \div D$ の除算を行なう除算器に関するものである。

除算 $M \div D$ を行なうには M と D を 2 進数で表現し、 M の上位桁数ビットと D の上位桁数ビットを比較し、 仮の商 Q_j を求め、 その Q_j について $Q_j \times D$ を求め、 更に $M - Q_j \times D$ により部分減算を行なうという計算をくり返していく。この場合、 部分商 Q_j が 1 ビット幅であると、 除算速度が遅いので一般に λ ビット (但し、 $\lambda = 2, 3, \dots$) 単位に部分除算をくり返していく。例えば近代科学社 1980 年発行、 堀越他訳「コンピュータの高

逐次演算方式」214～283頁、特に259頁8.4章「除数の逆数による除算」270頁8.8章「桁上げ保存形セル配列除算」を参照されたい。

従来、部分商 Q_j を求めるには、除数 D の上位桁数ビットの逆数を用いる等の手段により Q_j の近似値を求め、部分除算実行後にその補正を行なう手がとられていた。この補正のため、除算器の制御が複雑となり、除算器の高速化に限界があると共に、補正回路の回路規模が大きくなり易いという欠点があつた。

この発明は $M \div D$ の除算器において部分商 Q_j の算出を乗算化することにより除算器の制御部の簡単化と除算の高速化を図ることを目的としている。

この発明を次の順序に従つてのべる。

1. この発明における除算器の原理
2. この発明の実施例
3. この発明の原理の数式表現
4. 数式表現の証明

(3)

$$(R_1 = R_{L+1} \cdot 2^{L1} + \sum_{j=1}^{L-1} M_j \cdot 2^{(j-1)1} - D \sum_{j=1}^{L-1} Q_j \cdot 2^{(j-1)1})$$

$$\therefore R_1 = M - D \cdot Q_x \quad (5)$$

$$\text{但し } Q_x = \sum_{j=1}^{L-1} Q_j \cdot 2^{(j-1)1} \quad (6)$$

$$0 \leq R_1 < D \quad (7)$$

Q_j を式(2)から求めるのは計算時間が多くなる。従つて Q_j の簡単な算出法があれば除算 $M \div D$ の商 Q 、剰余 R は $Q = Q_x$ 、 $R = R_1$ として求めることができる。

1.2 切捨演算による Q_j の算出

Q_j の算出法として式(2)、式(3)の各々の項の下位 m ビットを切捨る計算法を考える。但し $m \geq 1$ とする。

2の補数で表現した数 x に対して下位 m ビットの切捨演算は $[x \cdot 2^{-m}]$ として表現できる。ここで $[x]$ は x を超えない最大整数を示すガウスの記号である。

式(2)、式(3)を以下により求め Q_j を求める近似

(5)

1. この発明における除算器の原理

1.1 除算方法

$M \div D$ の除算方法として次の簡化式で示す計算法を考える。

$$R_{L+1} = 0 \quad (1)$$

$j = L, L-1, \dots, 2, 1$ に対して

$$R_j = 2^L \cdot R_{j+1} + M_j - Q_j \cdot D \quad (2)$$

$$0 \leq R_j < D \quad (3)$$

$$M = \sum_{j=1}^{L-1} M_j \cdot 2^{(j-1)1} \quad (4)$$

$$\text{但し } M_j = \sum_{a=0}^{L-1} 2^{(j-1)1+a} \cdot (j-1)1+a = 0 \text{ 又は } 1$$

式(2)において、 $-Q_j \cdot D$ は部分除算、 Q_j は部分商である。 Q_j は次式(2')で求める。

$$Q_j = \left[\frac{2^L \cdot R_{j+1} + M_j}{D} \right] \quad (2')$$

式(2)に $\sum_{j=1}^{L-1} 2^{(j-1)1}$ を掛算すると式(1)を考慮して

(4)

式とする。ここで $S \cdot 1, S$ は定数である。

$$\begin{aligned} S \cdot 1 &\leq [(2^L \cdot R_{j+1}) \cdot 2^{-m}] + [(-Q_j) \cdot D \cdot 2^{-m}] + S \cdot 1 \\ &< [D \cdot 2^{-m}] \end{aligned}$$

ここで M_j は 1 ビット幅であるから m ビットの切捨て ($m \geq 1$) の結果 0 となる。

上式は更に次式によつて近似表現する。但し S は定数である。

$$[(2^L \cdot R_{j+1}) \cdot 2^{-m}] + [(-Q_j) \cdot D \cdot 2^{-m}] + S \geq 0 \quad (8)$$

$$[(2^L \cdot R_{j+1}) \cdot 2^{-m}] + [(-Q_{j-1}) \cdot D \cdot 2^{-m}] + S < 0 \quad (9)$$

この式(8)、(9)を同時に満足する Q_j を求めればよい。

1.3 キヤリア型横型加算器の利用

この発明の除算は式(2)の加算をキヤリア型横型加算器を利用することを特徴とする。

キヤリア型横型加算器はその出力 R_j の下位 m ビットの切捨演算を行なうと加算器内部のキヤリアが上位桁に伝播しないための誤差 α_j がランダム

(6)

に発生する。

ここで $\alpha_j = 0$ 又は 1 である。

α_j を考慮して式(8), (9)を次のように変え、 Q_j を求める近似式とする。なおキヤリア蓄積型加算器において誤差 α_j が生ずる理由は後ほど詳しくのべる。

$$[(2^j \cdot R_{j+1})2^{-m}] + [(-Q_j) \cdot D \cdot 2^{-m}] + S + \alpha_j \geq 0 \quad (10)$$

$$[(2^j \cdot R_{j+1})2^{-m}] + [(-Q_{j-1}) \cdot D \cdot 2^{-m}] + S + \alpha_j < 0 \quad (11)$$

上式において、

$$\left. \begin{array}{l} [(-Q_j) \cdot D \cdot 2^{-m}] = -Q_j \cdot [D \cdot 2^{-m}] \\ [(-Q_{j-1}) \cdot D \cdot 2^{-m}] = -(Q_{j-1}) \cdot [D \cdot 2^{-m}] \end{array} \right\}$$

と近似することにより次式をうる。

$$\left. \begin{array}{l} [(2^j \cdot R_{j+1})2^{-m}] - Q_j [D \cdot 2^{-m}] + S + \alpha_j \geq 0 \\ [(2^j \cdot R_{j+1})2^{-m}] - (Q_{j-1}) [D \cdot 2^{-m}] + S + \alpha_j < 0 \\ \frac{[(2^j \cdot R_{j+1})2^{-m}] + S + \alpha_j}{[D \cdot 2^{-m}]} - 1 < Q_j \leq \end{array} \right\}$$

(7)

1.5 Q_j の別解法

式(12)は除算を含むが、除算は一般に計算時間が長くなり易いので、これを乗算に変えると次式が得られる。

$$Q_j + \delta_{*,j} = \begin{cases} [X_1 \cdot v \cdot 2^{-1}] + 1 & X_1 > 0 \text{ のとき} \\ [X_1 \cdot v \cdot 2^{-1}] & X_1 \leq 0 \text{ のとき} \end{cases} \quad (18)$$

$$\text{但し } \delta_{*,j} = 0, 1 \quad (19)$$

$$X_1 = [(2^j \cdot R_{j+1})2^{-m}] + 24 + \alpha_j \quad (20)$$

$$v = \left[\frac{2^{10}}{[D \cdot 2^{-m}]} \right] \quad (21)$$

ここで $\delta_{*,j}$ の値は $0, 1$ の値であるが、その値を知ることはできないことである。しかし Q_j の代わりに $Q_j + \delta_{*,j}$ の値によつて式(2)から R_j を求めると $\delta_{*,j} = 1$ の場合 R_j の値が $-D$ だけ増えることから R_j の範囲は次式で与えられることが証明できる。

$$-D - \frac{21}{64} D \leq R_j < D \quad (22)$$

(9)

1.4 R_j と Q_j の範囲

式(12)は近似式である。このため R_j の範囲は式(3)を離脱するので実数 t を用いて R_{j+1} の範囲を次のように仮定する。

$$-t \cdot D \leq R_{j+1} < D \quad (13)$$

次に式(10), (11)で用いた v を用いて、整数 K を次式により定義する。

$$1 \leq \frac{D}{2^{m+K}} < 2 \quad (14)$$

ここで t, S を例えば $t = 1 + \frac{21}{64}, S = 24$ と定めると R_{j+1} の範囲は次のようになる。

$$-D - \frac{21}{64} D \leq R_{j+1} < D \quad (15)$$

(8)

式(15)と式(22)とを比較すると R_{j+1} と R_j の範囲は一致する。

1.6 剰余 R と商 Q の求め方

また $j = \ell$ とすると式(1)より $R_{\ell+1} = 0$ であり、この条件は式(15)を満たすから式(18)を用いて $Q_{\ell+1} + \delta_{*,\ell}$ を求め、キヤリア蓄積型加算器を用いて式(2)により R_{ℓ} を求めることができる。 R_{ℓ} は式(22)の条件を満たす。

R_{ℓ} は式(15)の範囲に収まっているから、 $j = \ell - 1$ としたとき、式(18)により再び $Q_{\ell-1} + \delta_{*,\ell-1}$ を求め、同様にして $R_{\ell-1}$ を求めることができる。

以下、同様にして $j = \ell - 2, \dots, 2, 1$ として $Q_j + \delta_{*,j}$ と R_j を求めることができる。 R_1 は式(22)を満たす。

以下、式(5), (6), (15)を再掲する。但し(6)は $Q_x \rightarrow Q_x'$ とする。

$$R_1 = M - D \cdot Q_x' \quad (23)$$

$$Q_x' = \sum_{j=1}^{\ell} (Q_j + \delta_{*,j}) 2^{(j-1)2} \quad (24)$$

—371—

(10)

$$-D - \frac{21}{64} D \leq R_1 < D \quad (25)$$

一方、商 Q 、剰余 R とは次の関係がある。

$$M = Q \cdot D + R \quad (26)$$

$$0 \leq R < D \quad (27)$$

式 (23) ~ (27) より次式が成立する。

$$R = R_1 + \theta \cdot n \quad (28)$$

$$Q = \sum_{j=1}^k (Q_j + \theta_{*,j}) 2^{(j-1)l-\theta} \quad (29)$$

$$\theta = \begin{cases} 2 : R_1 < -D \text{ のとき} \\ 1 : -D \leq R_1 < 0 \text{ のとき} \\ 0 : R_1 \geq 0 \text{ のとき} \end{cases} \quad (30)$$

1.7 この発明の原理の拡張

式のパラメータ t , S , K 等を適当に定めるとこの発明の原理に基づく除算の様々な表現ができるが、これらについてこの発明の原理の数式表現として後述する。

(11)

$$X = [(2^4 \cdot G_{j+1} \cdot 2^{-8}) + ((2^4 \cdot H_{j+1}) \cdot 2^{-8})] + 24 + \alpha_j \quad (E-5)$$

$$\alpha_j = 0, 1 \quad (E-6)$$

$$v = \left[\frac{2^{16}}{[D \cdot 2^{-8}]} \right] \text{ 但し } 2^{16} \leq D < 2^{17} \quad (E-8)$$

$$-21 \leq Q_j \leq 16 \quad (E-9)$$

$$G_j + H_j = 2^4 \cdot G_{j+1} + 2^4 \cdot H_{j+1} + M_j - (Q_j + \theta_{*,j}) \cdot D \quad (E-10)$$

$$-D - \frac{21}{64} D \leq G_j + H_j < D \quad (E-11)$$

$$R = G_1 + H_1 + \theta \cdot D \quad (E-12)$$

$$Q = \sum_{j=1}^k (Q_j + \theta_{*,j}) 2^{(j-1)l-\theta} \quad (E-13)$$

$$\theta = \begin{cases} 2 : G_1 + H_1 < -D \text{ のとき} \\ 1 : -D \leq G_1 + H_1 < 0 \text{ のとき} \\ 0 : G_1 + H_1 \geq 0 \text{ のとき} \end{cases} \quad (E-14)$$

次にこの発明の実施例を述べる。

第1図はこの発明の実施例を示し、4入力2出

2. この発明の実施例

この発明の原理に基づく除算器の実施例を示す前に実施例における除算の計算式をまとめて示す。

なお、式 (E-6) ~ 式 (E-7) の α_j , $\theta_{*,j}$ は乱数で自然に発生してしまうため、式 (E-4), 式 (E-5) の加算において α_j , $\theta_{*,j}$ を加算する回路等を作る必要はない。また $l = 4$ の場合を示す。

$$M = \sum_{j=1}^k M_j \cdot 2^{4(j-1)} \quad (E-1)$$

$$\text{但し, } M_j = \sum_{\mu=0}^3 \theta_{4(j-1)+\mu} \cdot 2^{\mu} \quad (E-2)$$

$$R_j = G_j + H_j, R_{j+1} = G_{j+1} + H_{j+1} \text{ として, } \quad (E-3)$$

$$G_{j+1} = 0, H_{j+1} = 0 \quad (E-4)$$

$$-D - \frac{21}{64} D \leq G_{j+1} + H_{j+1} < D \quad (E-5)$$

$$Q_j' = Q_j + \theta_{*,j} = \begin{cases} [X \cdot v \cdot 2^{-16}] + 1 & X \geq 0 \text{ のとき} \\ [X \cdot v \cdot 2^{-16}] & X < 0 \text{ のとき} \end{cases} \quad (E-6)$$

$$\text{但し, } \theta_{*,j} = 0, 1 \quad (E-7)$$

(12)

力のキャリア搭積型加算器 1 は式 (E-10) の加算を行なうもので、 $2^4 \cdot H_{j+1}$ を信号線 24 から、 $2^4 \cdot G_{j+1}$ を信号線 25 から、 M_j を信号線 22 から、 $-(Q_j + \theta_{*,j}) \cdot D$ を信号線 23 から、それ 2 進数表示のデータとして入力し、加算を実行して $H_j + G_j$ を求め H_j をレジスタ 24C、 G_j をレジスタ 34 にそれぞれ信号線 18, 19 を通じて出力する。加算器 1 を CSA と命名する。なお H_{j+1} は H_j の j の値が 1 つ大きいものを、 G_{j+1} は G_j の j の値が 1 つ大きいものを意味する。

レジスタ 2, 3 の内容の H_j , G_j は信号線 38, 39 を通じてキャリア伝播型加算器 4 に入力されて加算され、その加算結果は信号線 34 から、加算結果の符号は正及び零のとき 0、負のとき 1 として信号線 33 に出力される。

M_j 生成部 5 は式 (E-1) に示す M を、制御信号線 41 が 1 となると入力信号線 35 から入力し、その内部のレジスタに設定しておく、制御信号線 17 からのクロック信号に応じて M_j 、但し、 $j = 4, 4-1, \dots, 1$ を生成して信号線 22 に出力す

(13)

(14)

る。但し、制御信号線 15 の信号が 1 となると M_j を生成せず 0 を出力する。レジスタ 6 は制御信号線 41 が 1 となると除数 D を信号線 36 から入力し、 D の値を保持し続ける。

Q_j 計算部 7 は信号線 30 からレジスタ 6 の D を入力して式 (E-8) の v の値を求めて保持し、式 (E-5) の H_{j+1} を信号線 27 から、 G_{j+1} を信号線 28 から、定数の 24 を信号線 29 を通じ設定部 10 から入力し、 X を求め、更に式 (E-4) の右辺の計算を行なつて $Q_j + \delta_*, j$ を求め、信号線 31, 32 に出力する。設定部 10 には 2 進数表示の定数 24 が設定され信号線 29 に出力し続ける。 $-Q_j \cdot D$ 計算部 8 はレジスタ 6 の D を信号線 26 から、 $(Q_j + \delta_*, j)$ を信号線 31 から入力し、 $-(Q_j + \delta_*, j) \times D$ を計算して信号線 23 に出力する。

商計算部 9 は制御信号線 16 の制御信号により $(Q_j + \delta_*, j)$ の累和を求める内部レジスタをクリヤし、制御信号線 17 からのクロックに向期して信号線 32 上り入力される $(Q_j + \delta_*, j)$ につき

(15)

される。同時に制御信号線 16 上のクリヤ信号 52 がオンとなり、レジスタ 2, 3 と商計算部 9 の $(Q_j + \delta_*, j)$ の累和を求める内部レジスタをクリヤする。これは式 (E-2) の実行と、式 (E-13) の計算の準備に相当する。

次に制御部 11 はクロック信号 53 を $j = \ell, \ell - 1, \dots, 1$ に対応してクロック 54, 55, ..., 56 を順次出力する。すると Q_j 計算部 7 では式 (E-4) ~ (E-8) に基づいて、 $Q_j + \delta_*, j$ を求め、更に $-Q_j \cdot D$ 計算部 8 で $-(Q_j + \delta_*, j) D$ を求め、次にキャリア伝播型加算器 1 は信号線 24, 25, 22, 23 からそれぞれ $2^4 \cdot H_{j+1}$, $2^4 \cdot G_{j+1}$, M_j , $-(Q_j + \delta_*, j) D$ を入力し、式 (E-10) の加算を行ない、 $H_j + G_j$ を求め、その値をレジスタ 2 と 3 に分けて出力する動作を $j = \ell, \ell - 1, \dots, 1$ について順次行なう。

H_j と G_j の 2 つの値は常にキャリア伝播型加算器 4 に入力されているので R_1 の計算後、キャリアの伝播時間 57 を経過した後、信号線 33 から R_1 の加算結果の符号を時刻 58 で調べる。 $R_1 < 0$ の

$Q' = \sum_{j=1}^{\ell} (Q_j + \delta_*, j) 2^4 (j-1)$ の計算を行ない、制御信号線 15 の補正指示信号に従つて $Q = Q' - \delta$ 、但し $\delta = 0, 1, 2$ の補正計算を行ない、この結果得られた Q の値を信号線 40 から出力する。補正計算指示信号が制御信号線 15 から出されると M_j 生成部 5 は M_j の生成を中止して 0 を出力し、 $-Q_j \cdot D$ 生成部 8 は第 1 回目の補正計算指示信号で $\ell = 4$ であるから $+2^4 \cdot D$ を信号線 23 に出力し、第 2 回目の補正計算指示信号では $+2^4 \cdot D$ を信号線 23 に出力し、商計算部 9 は $Q' = \sum_{j=1}^{\ell} (Q_j + \delta_*, j) 2^4 (j-1)$ で求めた Q' から補正計算指示信号が 1 となる都度 $Q' - 1$ を求め、即ち $Q = Q' - \delta$ 、 $\delta = 0, 1, 2$ を求める。制御部 11 から各制御信号線に制御信号、クロックなどを出す。

第 2 図は第 1 図に示した実施例の動作を説明するタイミング図である。制御信号線 12 から除算開始指示信号 50 を入力すると、制御信号線 41 から M と D の入力指示信号 51 がオンとなり、 M_j 生成部 5 及びレジスタ 6 にそれぞれ M と D が設定

(16)

場合、制御部 11 は第 1 回目の補正計算指示信号 59 を制御信号線 15 から出力し、同時にクロック信号 60 をオンとする。加算器 CSA 1 の入力は $j = \ell, \ell - 1, \dots, 1$ とクロックが進むとそれぞれ $2^4 = 2^4$ 倍される構造になっているから第 1 回目の補正計算指示信号 59 が出たのちは、 $-Q_j \cdot D$ 計算部 8 から $2^4 \cdot D$ が、 M_j 生成部 5 から 0 が加算器 CSA 1 に入力され、 $2^4 \cdot R_1 + 2^4 \cdot D + 0 = 2^4 (R_1 + D)$ の加算がされる。これは式 (E-14) で $\delta = 1$ に相当する。

次に一定時間 61 の後、 $2^4 (R_1 + D)$ の加算結果の符号を時点 62 で調べ、 $(R_1 + D) \geq 0$ の場合は計算が全て終了であるので除算終了表示の制御信号線 14 から信号線 63 で外部に知らせる。 $(R_1 + D) < 0$ のときは第 1 回目の補正計算と同様な加算を行なうが、信号線 23 からは $2^4 \cdot D$ を入力して $2^4 (R_1 + D) + 2^4 + 2^4 \cdot D = 2^4 (R_1 + 2 \cdot D)$ を求める。これは式 (E-14) で $\delta = 2$ に相当する。補正計算は高々 2 回で終了する。 $\delta = 0, 1, 2$ の区別は制御信号線 13 から外部に知らされる。

(17)

-373-

(18)

このよう構造になつてゐるから整数MとDを入力し、 $M \div D$ の商Q、剰余Rを求めることがで能く。

第3図は1ビット全加算器の記法を示したもので入力信号線80, 81, 82からそれぞれ0又は1のデータを入力し、それらの加算結果を2進表示して 2^1 の位を83から、 2^0 の位を84から出力する。

第4図は加算器CSA1の具体例を示す。

信号線23中の上位の $L' \times 5$ ビットは信号線230に与えられ、下位5ビットは信号線231に与えられる。信号線230中の上位の $L' \times 3$ のデータは加算器500で加算され、信号線231のデータと、信号線22の下位4ビットが与えられる信号線220のデータと、信号線24中の下位5ビットが除かれた信号線240のデータと、信号線25中の下位4ビットが除かれた信号線250のデータと、信号線230の下位の L' ビットのデータとが加算器501で加算され、その加算結果と、信号線230の下位より $L' + 1 \sim 2 L'$ ビット

(19)

第6図はQJ計算部7の具体例を示す。

第4図と同様なキヤリア寄積型加算器600、Dの値から式(E-8)に基づいて v を求める組合せ回路、又はROMからなる回路620、 v の値を格納するレジスタ630、信号線635, 636と639の積を求める乗算器640、信号線641, 642上のデータの加算を行なうキヤリア伝播型加算器650、信号線641, 642のデータの加算を行なうキヤリア寄積型加算器662、その加算結果を加算するキヤリア伝播型加算器660などが設けられる。乗算器640はAND素子とキヤリア寄積型加算器を組合せてできることは自明である。ここで乗算器640の加算結果の下位13ビットは切捨てられ、信号線641, 642に出力する。

このよう構造になつてゐるから、信号線27, 28, 29からそれぞれ $[(2^4 \cdot H_{j+1})2^{-13}]$, $[(2^4 \cdot G_{j+1})2^{-13}]$ と実数24を入力し、式(E-5)に基づいてXを求め、レジスタ630中の v と $X \cdot v$ の積を乗算器640で求め、 $[X \cdot v \cdot 2^{-13}]$

(21)

のデータとが加算器502で加算され、この加算器502の一方の出力と、加算器500の加算結果とが加算され、更にその加算結果と、加算器502の他方の加算結果とが加算器504で加算される。加算器500～504はそれぞれ1ビット全加算器490が L' 個並べられ、 L' ビットの3つのデータが入力され、各対応ビットが全加算器490でそれぞれ加算され、その加算結果の L' ビットと、その上位1ビットを除去し、代つて最下位に0を1ビット加えて L' ビットとしたものとが出力されるものである。

このよう構造になつてゐるから L' ビットで表現して、信号線22, 23, 24, 25から4種の2進数データを入力し、それらの加算を行ない加算結果を2種の2進数データとして出力することができる。

第5図は4のキヤリア伝播型加算器4の具体例を示す。信号線380, 390, 340はそれぞれ信号線38, 39, 34に対応する。410は1ビット全加算器である。

(20)

の値を求める、 $X > 0$, $X \leq 0$ に応じて式(E-4)の計算を行ない $Q_j + \delta_j$, j の値を信号線660から1クロックで即ち高速に求めることができる。なお信号線661は信号線641, 642上の信号の加算結果の符号を示し、第5図中の信号線33と対応し、この符号に応じて加算器660又は650の出力が信号線660へ出力される。

3. この発明の原理の数式表現

この発明の除算の原理を定理及び定理の系として数式表現により示す。

3.1 除算定理

整数の除算 $M \div D$ の商Q、剰余Rは式(100)～式(105)を前提に式(106)～式(114)に示す漸化式を $j = L, L-1, \dots, 2, 1$ とくり返して得られる Q_j と G_j, H_j を基に、式(115)～式(117)により求めることができる。ここで $M, D, G_j, H_j, G_{j+1}, H_{j+1}$ は整数、 m, K, i は定数でいすれも整数であり、 α_j はその値が j と共に不規則に変わる乱数である。

—374—

(22)

$$1 \leq \frac{D}{2^{m+k}} < 2 \quad (100)$$

$$1 \leq K \quad (101)$$

$$l = 1, 2, 3, \dots \quad (102)$$

$$2^l + S + 2 \leq 2^k \quad (103)$$

$$-3 + S - [2^l \cdot t] \geq 0, [2^l \cdot t] \geq 1$$

$$-t \leq -(S + 2^l + 2) \frac{1}{2^k} - 1, 0 < \frac{(S + 2^l + 2)}{2^k} \leq 1$$

$$-2^{k+l+1} \leq -1 + [(1-t) \cdot 2^{k+l+1}] + S + \alpha_j, S + \alpha_j < 2^{k+l+1} \quad (104)$$

$$M = \sum_{j=1}^l M_j \cdot 2^{(j-1)l}, \text{ 但し } M_j = \sum_{a=0}^{l-1} \delta_{(j-1)l+a} \cdot 2^a,$$

$$\delta_{(j-1)l+a} = 0 \text{ 又は } 1 \quad (105)$$

$$R_{l+1} = 0 \quad (106)$$

$$-t \cdot D \leq G_{j+1} + H_{j+1} < D \quad (107)$$

$$Q_j + \delta_{*,j} = \begin{cases} [X \cdot v \cdot 2^{-(k+l+1)}] + 1 & X \geq 0 \\ [X \cdot v \cdot 2^{-(k+l+1)}] & X < 0 \end{cases} \quad (108)$$

(23)

$$\delta_{*,j} = 0 \text{ 又は } 1 \quad (109)$$

$$X = [(2^l \cdot G_{j+1}) \cdot 2^{-m}] + [(2^l \cdot H_{j+1}) \cdot 2^{-m}] + S + \alpha_j \quad (110)$$

但し、 $\alpha_j = 0, 1$

$$v = \left[\frac{2^{k+l+2}}{[D \cdot 2^{-m}]} \right] \quad (111)$$

$$-[t \cdot 2^l] \leq Q_j \leq 2^l \quad \text{但し } t \geq 1 \quad (112)$$

$$G_j + H_j = 2^l (G_{j+1} + H_{j+1}) + M_j - (Q_j + \delta_{*,j}) \cdot D \quad (113)$$

$$-(S + 2^l + 2) \frac{D}{2^k} - D \leq G_j + H_j < D + (3 - S + [2^l \cdot t]) \cdot 2^m \quad (114)$$

$$R = G_1 + H_1 + \delta_{*,1} \cdot D \quad (115)$$

$$Q = \sum_{j=1}^l (Q_j + \delta_{*,j}) 2^{(j-1)l} - \delta \quad (116)$$

$$\delta = \begin{cases} 2 & G_1 + H_1 < -D \text{ のとき} \\ 1 & -D \leq G_1 + H_1 < 0 \text{ のとき} \\ 0 & G_1 + H_1 \geq 0 \text{ のとき} \end{cases} \quad (117)$$

なおこの発明の原理で述べた R_j, R_{j+1} は次式で定義される。

(24)

$$R_j = G_j + H_j \quad (118)$$

$$R_{j+1} = G_{j+1} + H_{j+1} \quad (119)$$

$$\text{但し } \delta_{*,j} = 0, 1$$

$$X' = [(2^l \cdot G_{j+1}) \cdot 2^{-m}] + [(2^l \cdot H_{j+1}) \cdot 2^{-m}] + 24 + \alpha_j \quad (304)$$

3.2 この発明の具体例

除算の定理において、定数を具体的に定めることにより除算の具体的な方法を定めることができることを示す。

定数は式 (100) ~ (105) を満たす例として次のとおり定める。

$$m = 56, K = 7, l = 4, t = 1 + \frac{2^l}{64}, S = 24$$

$$M = \sum_{j=1}^l M_j \cdot 2^{4(j-1)} \quad (300)$$

$$\text{但し } M_j = \sum_{a=0}^{l-1} \delta_{(j-1)l+a} \cdot 2^a$$

$$G_{l+1} = 0, H_{l+1} = 0 \quad (301)$$

$$-D - \frac{2^l}{64} D \leq G_{j+1} + H_{j+1} < D \quad (302)$$

$$Q_j + \delta_{*,j} = \begin{cases} [X' \cdot v \cdot 2^{-14}] + 1 & X' > 0 \text{ のとき} \\ [X' \cdot v \cdot 2^{-14}] & X' \leq 0 \text{ のとき} \end{cases} \quad (303)$$

$$\alpha_j = 0 \text{ 又は } 1 \quad (305)$$

$$v = \left[\frac{2^{14}}{[D \cdot 2^{-14}]} \right] \quad \text{但し } 2^{14} \leq D < 2^{15} \quad (307)$$

$$-2^4 \leq Q_j \leq 16 \quad (308)$$

$$G_j + H_j = 2^4 (G_{j+1} + H_{j+1}) + M_j - (Q_j + \delta_{*,j}) \cdot D \quad (309)$$

$$-D - \frac{2^l}{64} D \leq G_j + H_j \leq D \quad (310)$$

$$R = G_1 + H_1 + \delta_{*,1} \cdot D \quad (311)$$

$$Q = \sum_{j=1}^l (Q_j + \delta_{*,j}) 2^{4(j-1)} - \delta \quad (312)$$

$$\delta = \begin{cases} 2 & G_1 + H_1 < -D \text{ のとき} \\ 1 & -D \leq G_1 + H_1 < 0 \text{ のとき} \\ 0 & G_1 + H_1 \geq 0 \text{ のとき} \end{cases} \quad (313)$$

(25)

-375-

(26)

4. この発明の原理の数式表現の証明

4.1 単 倍

定数 x_1 、整数 φ に対し次式が成立する。但し r_φ は整数である。

$$\sum_{j=1}^{\varphi} [x_j] = \sum_{j=1}^{\varphi} x_j - r_\varphi \quad (200)$$

$$0 \leq r_\varphi \leq \varphi - 1$$

$$[x_1] - [x_2] = [x_1 - x_2] + \delta_1 \quad (201)$$

$$\delta_1 = 0, 1$$

また、次の略記号を定める。

$$\left. \begin{array}{l} h_{j+1} = [(2^k H_{j+1}) 2^{-m}] \\ g_{j+1} = [(2^k G_{j+1}) 2^{-m}] \\ h_j = [(2^k H_j) 2^{-m}] \\ g_j = [(2^k G_j) 2^{-m}] \end{array} \right\} \quad (202)$$

$$(107) \times 2^k$$

$$-2^k \cdot t \cdot D \leq 2^k \cdot G_{j+1} + 2^k \cdot H_{j+1} < 2^k \cdot D$$

$$\therefore [(-2^k \cdot t) D \cdot 2^{-m}] \leq [(2^k G_{j+1} + 2^k \cdot H_{j+1}) \cdot 2^{-m}]$$

(27)

$$t = 1 + \epsilon \quad \text{但し } \epsilon \geq 0 \quad (208)$$

とおくと、

$$-2^{k+\lambda+1} - 1 + (-\epsilon \cdot 2^{k+\lambda+1}) < g_{j+1} + h_{j+1} < 2^{k+\lambda+1}$$

両辺に $S + \alpha_j$ を加える

$$-2^{k+\lambda+1} - 1 + (-\epsilon \cdot 2^{k+\lambda+1}) + S + \alpha_j < X < 2^{k+\lambda+1} + S + \alpha_j$$

$$-1 < \frac{-2^{k+\lambda+1} - 1 + (-\epsilon \cdot 2^{k+\lambda+1}) + S + \alpha_j}{2^{k+\lambda+1}} < \frac{X}{2^{k+\lambda+1}}$$

$$< \frac{2^{k+\lambda+1} + S + \alpha_j}{2^{k+\lambda+1}} < 1$$

式 (104) より

$$-1 < \frac{X}{2^{k+\lambda+1}} < 1 \quad (209)$$

次に

$$A = [X \cdot v \cdot 2^{-(k+\lambda+1)}] - \left[\frac{X}{D \cdot 2^{-m}} \right]$$

を求める。式 (111) より v を代入して、公式 (201) を適用

$$< [(2^k \cdot D) 2^{-m}]$$

式 (200) より

$$[(-2^k \cdot t) D \cdot 2^{-m}] - r_1 \leq g_{j+1} + h_{j+1} < [(2^k \cdot D) 2^{-m}] - r_1$$

$$\text{但し, } r_1 = 0, 1$$

左辺: $r_1 = 1$ で最大

$$[(-2^k \cdot t) D \cdot 2^{-m}] - 1 \leq g_{j+1} + h_{j+1} \quad (203)$$

右辺: $r_1 = 0$ で最小

$$g_{j+1} + h_{j+1} < [(2^k \cdot D) 2^{-m}] \quad (204)$$

式 (100) より、 $D \cdot 2^{-m} < 2^{k+1}$ (205)

$$\therefore [2^k \cdot D \cdot 2^{-m}] < 2^{k+1+1} \quad (206)$$

式 (205) より、 $-2^{k+1} < -D \cdot 2^{-m}$

$$\therefore [-t \cdot 2^{k+1+1}] < [-2^k \cdot t \cdot D \cdot 2^{-m}] \quad (207)$$

式 (203), (204), (206), (207) より

$$-1 + [-t \cdot 2^{k+1+1}] < g_{j+1} + h_{j+1} < 2^{k+1+1}$$

(28)

$$A = [X \cdot \frac{2^{k+\lambda+1}}{[D \cdot 2^{-m}]}] \cdot 2^{-(k+\lambda+1)} - \frac{X}{[D \cdot 2^{-m}]} + \delta_*$$

$$\delta_* = 0, 1$$

$$A = \left[\frac{X}{2^{k+\lambda+1}} \left\{ \left[\frac{2^{k+\lambda+1}}{[D \cdot 2^{-m}]} \right] - \frac{2^{k+\lambda+1}}{[D \cdot 2^{-m}]} \right\} \right] + \delta_*$$

$$\therefore \epsilon' = \left[\frac{2^{k+\lambda+1}}{[D \cdot 2^{-m}]} \right] + \frac{2^{k+\lambda+1}}{[D \cdot 2^{-m}]} \quad (210)$$

とおくと、

$$A = \left[\frac{-X}{2^{k+\lambda+1}} + \epsilon' \right] + \delta_* \quad (211)$$

但し、 $0 \leq \epsilon' < 1$

式 (209) ~ (211) から

$$A = \begin{cases} -1 + \delta_* & X \geq 0 \\ \delta_* & X < 0 \end{cases} \quad (212)$$

$$\therefore \left[\frac{X}{D \cdot 2^{-m}} \right] + \delta_* = \begin{cases} [X \cdot v \cdot 2^{-(k+\lambda+1)}] + 1 & X \geq 0 \\ [X \cdot v \cdot 2^{-(k+\lambda+1)}] & X < 0 \end{cases} \quad (213)$$

(29)

(30)

よつて $\delta_s = \delta_0, j$ と置ると式 (108) より次式が成立。

$$\therefore Q_j = \left[\frac{X}{[D \cdot 2^{-m}]} \right] \quad (214)$$

$$\frac{X}{[D \cdot 2^{-m}]} - 1 < Q_j \leq \frac{X}{[D \cdot 2^{-m}]}$$

$$X + (-Q_j) \cdot [D \cdot 2^{-m}] \geq 0 \quad (215)$$

$$X + (-Q_j - 1) \cdot [D \cdot 2^{-m}] < 0 \quad (216)$$

一方、整数 I 、実数 x に対し次の式が成立する。

$$[I+x] = I + [x] \quad (217)$$

X は整数であるから、式 (215) ~ (216) に上の式を適用すると、

$$X + [(-Q_j) \cdot [D \cdot 2^{-m}]] \geq 0 \quad (218)$$

$$X + [(-Q_j - 1) \cdot [D \cdot 2^{-m}]] < 0 \quad (219)$$

一方、整数 I 、実数 $x > 0$ に対し P を整数として次式が成立する。

(31)

$$\text{但し、 } 0 \leq P_s \leq I_s + 1 \quad (227)$$

4. 1. 1 Q_j の下限 (式 (112) の左辺)

$Q_j = -2^{\lambda} \cdot t$ とした式 (222) の左辺を U とおく、但し X は式 (110) を代入

$$g_{j+1} + h_{j+1} + s + \alpha_j + [2^{\lambda} t \cdot D \cdot 2^{-m}] + P_s = U$$

$$(228)$$

式 (203) + (228)

$$[(-2^{\lambda} t) D \cdot 2^{-m}] - 1 + s + \alpha_j + [2^{\lambda} t \cdot D \cdot 2^{-m}] + P_s \leq U$$

式 (200) を適用

$$-r_s - 1 + s + \alpha_j + P_s \leq U$$

$$r_s = 0, 1$$

上式の左辺は $r_s = 1, \alpha_j = 0, P_s = -I_s$ のとき最小となる。

$$\therefore -2 + s - I_s \leq U$$

よつて、 $I_s = [2^{\lambda} \cdot t]$ とおくと、

$$-2 + s - [2^{\lambda} \cdot t] \leq U$$

$$\left. \begin{aligned} [(-I_s) \cdot [x]] &= [(-I_s) \cdot x] + P_s \\ \text{但し、 } 0 \leq P_s &\leq I_s & I_s \geq 0 \text{ のとき} \\ I_s \leq P_s &\leq 0 & I_s \leq 0 \text{ のとき} \end{aligned} \right\} \quad (220)$$

式 (218) ~ 式 (219) において Q_j の範囲を次の通り仮定し、公式 (220) を式 (218), (219) に適用する。

$$-I_s \leq Q_j \leq I_s \quad (221)$$

但し、 $-I_s \leq -1, 0 \leq I_s$

(i) $Q_j < 0$ のとき

$$X + [(-Q_j) \cdot [D \cdot 2^{-m}]] + P_s \geq 0 \quad (222)$$

$$X + [(-Q_j - 1) \cdot [D \cdot 2^{-m}]] + P_s < 0 \quad (223)$$

但し、 $-I_s \leq P_s \leq 0 \quad (224)$

(ii) $Q_j \geq 0$ のとき

$$X + [(-Q_j) \cdot [D \cdot 2^{-m}]] + P_s \geq 0 \quad (225)$$

$$X + [(-Q_j - 1) \cdot [D \cdot 2^{-m}]] + P_s < 0 \quad (226)$$

(32)

しかるに式 (104) より

$$1 \leq U \quad (229)$$

また、式 (104) より $-I_s \leq -1$ の仮定は満たされている。また、 $Q_j \leq -2^{\lambda} \cdot t - 1$ のとき、式 (223) が成立しないのは明らかである。

$$\therefore -[2^{\lambda} \cdot t] \leq Q_j \quad (230)$$

4. 1. 2 Q_j の上限 (式 (112) の右辺)

$Q_j = 2^{\lambda}$ として式 (226) の左辺を V とおく、但し X は式 (110) を使う。

$$V = g_{j+1} + h_{j+1} + s + \alpha_j + [(-2^{\lambda} - 1) \cdot D \cdot 2^{-m}] + P_s$$

$$(231)$$

式 (204) + 式 (231)

$$V < [2^{\lambda} \cdot D \cdot 2^{-m}] + [(-2^{\lambda} - 1) \cdot D \cdot 2^{-m}] + P_s + s + \alpha_j$$

$$\therefore V < [(-D) \cdot 2^{-m}] + P_s - r_s + s + \alpha_j \quad (232)$$

$$r_s = 0, 1$$

(33)

一方、式(100)より $-D \cdot 2^{-m} \leq -2^k$ が成立するから、上式の右辺は $[(-D) \cdot 2^{-m}] \leq -2^k, r_s=0, \alpha_j=1, P_s=I_s+1$ のとき最大となるから

$$V < -2^k + I_s + 1 + S + 1$$

よつて $I_s = 2^k$ とすれば

$$V < -2^k + 2^k + S + 2$$

しかるに式(103)より

$$V < 0$$

また、 $Q_j \geq 2^k + 1$ とすると式(225)が成立しないのは明らかである。

$$\therefore Q_j \leq 2^k \quad (233)$$

また、 $I_s \geq 0$ の仮定は $I_s \geq 1$ より成立している。

4. 1. 3 $G_j + H_j$ の下限(式(114)の左辺)

式(222)～(227)を1つにまとめる。但し X は式(110)を代入し、両辺に $[M_j \cdot 2^{-m}] = 0$ を加え

(35)

$$\therefore -(S+2^k+2) \cdot 2^m - \delta_s, j \cdot D \leq G_j + H_j$$

式(100)より $2^m \leq \frac{D}{2^k}$ が成立する。これに $\delta_s, j=1$ を代入

$$\therefore -(S+2^k+2) \cdot \frac{D}{2^k} - D \leq G_j + H_j \quad (236)$$

4. 1. 4 $G_j + H_j$ の上限(式(114)の右辺)

前記と同様にして

$$[(G_j + H_j - D - \delta_s, j \cdot D) \cdot 2^{-m}] - r_s + S + \alpha_j + P < 0$$

$$[(G_j + H_j - D - \delta_s, j \cdot D) \cdot 2^{-m}] < r_s - S - \alpha_j - P$$

但し $r_s = 0, 1, 2, 3$

上記の左辺は $r_s = 3, \alpha_j = 0, P = -[2^k + t]$ のとき最大となる。

$$\therefore [(G_j + H_j - D - \delta_s, j \cdot D) \cdot 2^{-m}] < 3 - S + [2^k + t]$$

$$\therefore G_j + H_j < D - \delta_s, j \cdot D + (3 - S + [2^k + t]) \cdot 2^m$$

上記の右辺は $\delta_s, j=0$ のとき最大となる。

$$\therefore G_j + H_j < D + (3 - S + [2^k + t]) \cdot 2^m \quad (237)$$

(37)

る。

$$S_{j+1} + H_{j+1} + S + \alpha_j + [M_j \cdot 2^{-m}] + [(-Q_j) \cdot D \cdot 2^{-m}] + P \geq 0 \quad (234)$$

$$S_{j+1} + H_{j+1} + S + \alpha_j + [M_j \cdot 2^{-m}] + [(-Q_{j-1}) \cdot D \cdot 2^{-m}] + P < 0 \quad (235)$$

$$\text{但し} \quad \begin{cases} -I_s \leq P \leq 0 & Q_j < 0 \\ 0 \leq P \leq I_s + 1 & Q_j \geq 0 \end{cases} \quad \text{のとき}$$

式(234)に公式(200)を適用し、式(113)を代入

$$[(G_j + H_j + \delta_s, j \cdot D) \cdot 2^{-m}] - r_s + S + \alpha_j + P \geq 0$$

但し $r_s = 0, 1, 2, 3$

$$\therefore [(G_j + H_j + \delta_s, j \cdot D) \cdot 2^{-m}] \geq r_s - S - \alpha_j - P$$

上式の右辺は $r_s = 0, \alpha_j = 1, P = 2^k + 1$ のとき最小となる。

$$\therefore [(G_j + H_j + \delta_s, j \cdot D) \cdot 2^{-m}] \geq -(S+1+2^k+1)$$

$$\therefore -(S+2^k+2) \cdot 2^m \leq G_j + H_j + \delta_s, j \cdot D$$

(36)

4. 1. 5 $G_{j+1} + H_{j+1}$ の範囲と $G_j + H_j$ の範囲の関係

$G_{j+1} + H_{j+1}$ の範囲が $G_j + H_j$ を含むことを明らかにする。

上限の差を U_p とおくと

$$U_p = D - (D + (3 - S + [2^k + t]) \cdot 2^m)$$

$$\therefore U_p = -(3 - S + [2^k + t]) \cdot 2^m = (-3 + S - [2^k + t]) \cdot 2^m$$

式(104)より、 $U_p \geq 0$

下限の差を L_{ow} とおくと、

$$L_{ow} = -(S+2^k+2) \cdot \frac{D}{2^k} - D + t \cdot D \geq 0$$

式(104)より

$$L_{ow} \geq 0$$

4. 1. 6 RとQの算出

式(113)の両辺で $\sum_{j=1}^s 2^{(j-1)k}$ をとる。但し、 R_j は式(118)、 R_{j+1} は式(119)を代入

$$\sum_{j=1}^k R_{j-2}(j-1)2^j = \sum_{j=1}^k R_{j+1-2}2^j + \sum_{j=1}^k M_{j-2}(j-1)2^j$$

$$-D \sum_{j=1}^k (Q_j + \delta_{j-1})2^{j-1}$$

$$R_1 = R_2 + \dots + M - D \cdot Q_x \quad (240)$$

$$\text{但し } Q_x = \sum_{j=1}^k (Q_j + \delta_{j-1})2^{j-1}$$

よつて、式(106)より

$$R_1 = M - D \cdot Q_x \quad (241)$$

一方、 $M \div D$ の商 Q 、剰余 R は次の関係がある。

$$M = Q \times D + R \quad (242)$$

$$0 \leq R < D \quad (243)$$

式(241)、(242)より

$$R - R_1 = -D \cdot (Q - Q_x) \quad (244)$$

よつて R と R_1 の差は Q 、 Q_x が整数であるから、 D の整数倍の差があることがわかる。

R_1 の範囲は式(114)で $j=1$ として、

(39)

説明図、第4図は第1図中のキャリア蓄積型加算器1の具体例を示す図、第5図は第1図中のキャリア伝播型加算器4の具体例を示す図、第6図は第1図中のQJ計算部7の具体例を示す図、第7図は第4図中の加算器500～504の一例を示す図である。

1：キャリア蓄積型加算器、2、3：レジスタ、
4：キャリア伝播型加算器、5：MJ生成部、
6：D蓄積用レジスタ、7：QJ計算部、8：
-QJD計算部、9：商計算部、10：定数設定部、11：制御部。

$$-2D < -\frac{(S+2^k+2)D}{2^k} - D \leq R_1 < D \quad (245)$$

$$-R = R_1 + \delta \cdot D \quad (246)$$

$$\text{但し } \delta = \begin{cases} 2 & R_1 < -D \text{ のとき} \\ 1 & -D \leq R_1 < 0 \text{ のとき} \\ 0 & R_1 \geq 0 \end{cases} \quad (247)$$

式(246)→(244)に代入

$$Q = Q_x - \delta = \sum_{j=1}^k (Q_j + \delta_{j-1})2^{j-1} \quad (248)$$

$M \div D$ の除算を求めるときの部分剰余 Q_j の代わりに $Q_j' = Q_j + \delta_{j-1}$ 、但し $\delta_{j-1} = 0, 1$ なる Q_j' によつて除算を進めることができる。しかも Q_j' を高速に求める回路は簡単に作れる。以上説明したように除算器の部分商計算部を簡単に作ることができ、除算を高速に行なえる利点がある。

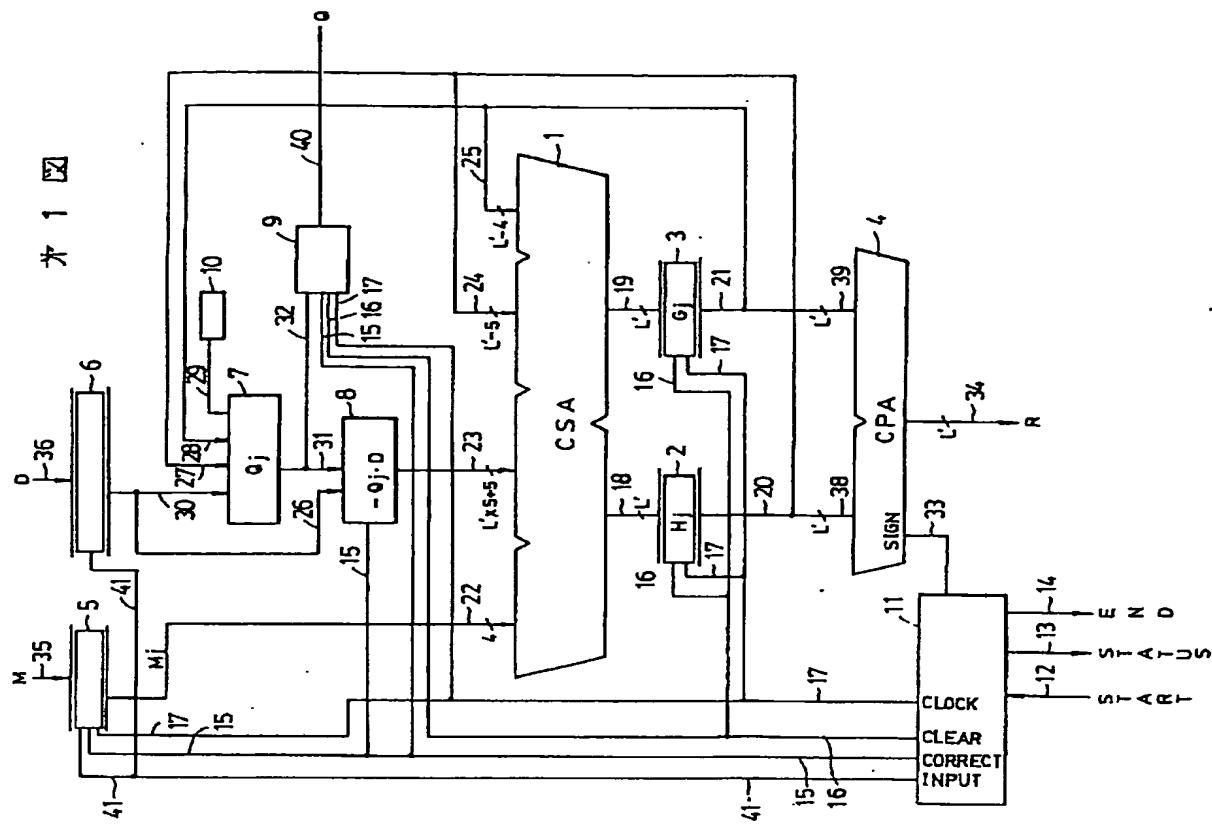
4. 図面の簡単な説明

第1図はこの発明の一実施例を示すブロック図、第2図は第1図に示した実施例の動作を説明するタイミング図、第3図は1ビット加算器の回路の

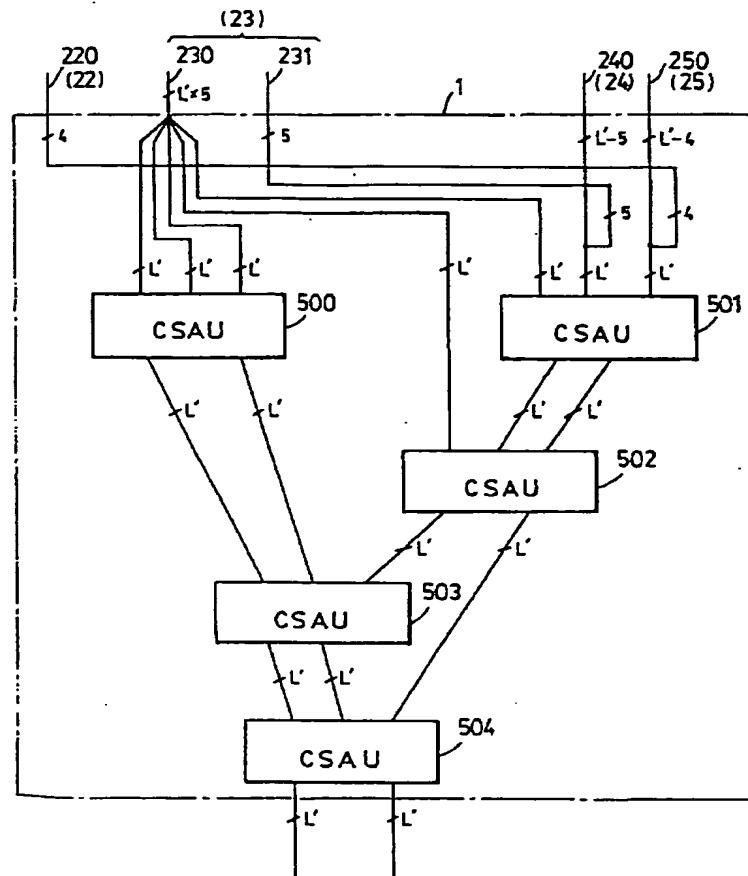
(40)

特許出願人 日本電信電話公社

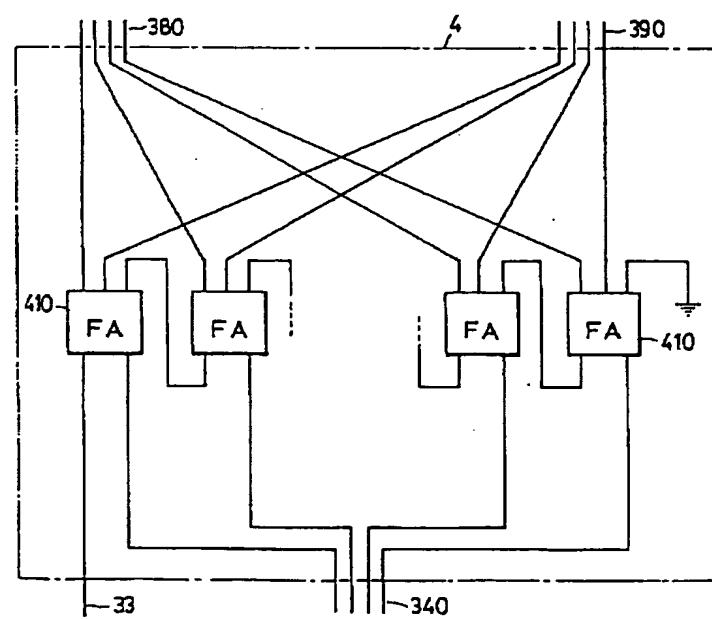
代理人 草野 卓



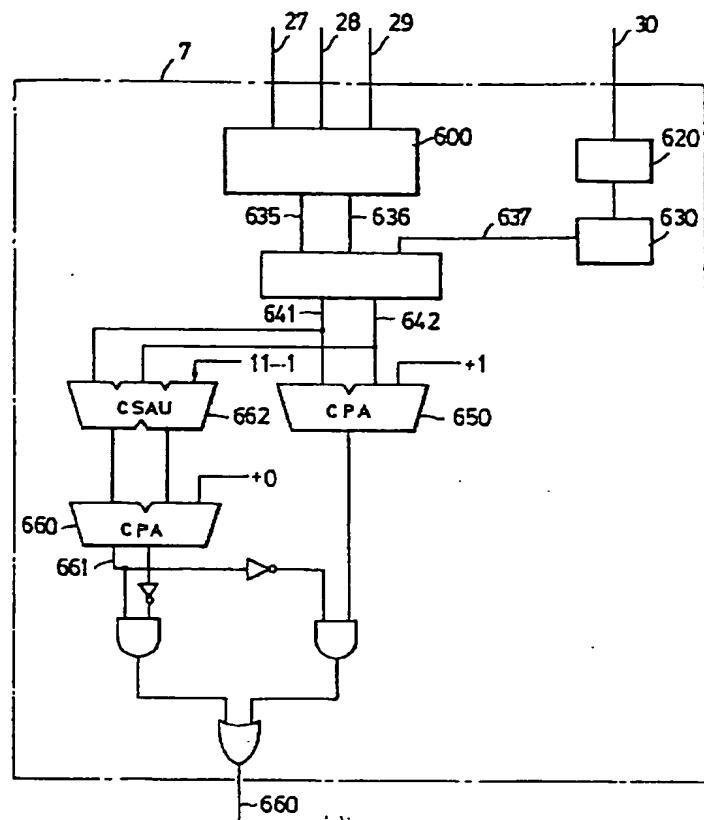
第4図



第5図



考 6 図



考 7 図

